

勿凝学問 357

リーダーの今昔とやせ我慢の美学

2011年2月9日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

最近、頭の中が日本文明評論家ようになってきていて、手帳には「リーダーの今昔とやせ我慢の美学」とか「財源論と水を差すな日本の文化」とか「ねたみそねみの日本の経済政策の意味」とか、普通の人がみれば、よ〜く考えないと意味が分からないメモが書き留められている。そんな時、ネットに、[「信念なし。緊張感や使命感欠落」 藤井副長官が首相を叱責](#)の記事が出てきたので、昨晚、「リーダーの今昔とやせ我慢の美学」として考えていた断片を、HPに書いていたのである。ということで、HPの文章を若干のバージョンアップをして、勿凝学問 357 として残しておくことにした。

ふ〜ん。

- [「信念なし。緊張感や使命感欠落」 藤井副長官が首相を叱責](#) 産経ニュース

でもね、民主党の中で藤井さんこそは財政をよく分かっていると周りのみんなが思っている中、かつて野党時代に、「総予算207兆円の1割から2割くらいは簡単に切れる」とおっしゃった罪は、ベーリング海峡よりも深いと思いますよ。

〔谷垣総裁 [代表質問](#)〕

藤井官房副長官はかつて「総予算207兆円の1割から2割くらいは簡単に切れる」と豪語されましたが、何のことはない、政権交代の効果として切れたのは総予算の1割ではなく、目標額の1割に過ぎません。

最近、つまり民主党が大きく政策の舵を切って「税と社会保障の一体改革」に乗り出しから、僕がよく話すのは、戦国時代とかには、「忠義者」とか「彼は信義を重んじる」という評判が立つために、若いときからみんな必死にやせ我慢をしながら生きていたんだよなということ。人間、本当は、目的のためなら手段を選ばず、勝つためならば卑怯なことでもやりたくなるものだろうけど、そこをなんとか我慢をする。やせ我慢をしながら人々からみて信頼できる人物として振る舞うことで、同時代に生きている人々からの信頼を勝ち得てきた。そしてその勝ち得た信頼が、それまでやせ我慢によって築き上げられてきた

ストイックな人格が触媒となって、周りの者からの尊敬に変化し、この人のためならばという、彼に近い人たちからの忠誠心も醸成されていたのだと思う。そして、その人物が一言いえば、あなたが言うのだから信じようと多くの人たちがついていく、そうしたリーダーが生まれるのだと思う。

我々研究者のように、説明することが仕事なんてのは、二流の仕事なのであって、説明がなくても、その人の一言であるから説得力を持つ、そういうのが一流の政治家の持つべき資質なのではないかな。そして、将来、国家のトップに立ち、大きな仕事をするつもりだったのであれば、やはり、若いときから、それなりの人格形成の努力をしておいて欲しかった。

ところが今の日本の政治家、特に与党の政治家は、そうしたやせ我慢の美学をかけらも感じさせず、その場限りのごまかしをはじめ、その時その時に言いたいことを散々言い、やりたいことを散々やってきたようにみえてしまうのである。だから、徹底したポピュリズムで政権を奪取した今になると、彼らの昔の言動をよく知る世間からは、「お前にだけは言われたくない」という状況が、毎日のように出来しているのである。

部下達から忠誠心や尊敬を得られないリーダーたちによる統治状態。そうした側面も、日本政治の破綻の一面のような気がする。彼らが大きく政策の舵を切った後、ほとんど毎日思うことである。

参考までに

彼らの昔の言動をうかがい知ることができるひとつの資料——お暇な人は目を通すことだ。

- [年金制度をはじめとする社会保障制度改革に関する両院合同会議の会議録議事情報一覧](#)（2005年4月8日から7月29日計8回開催）

この議事録に基づいて書いた僕の論文もご参考までに。

- 「[年金騒動の政治経済学——政争の具としての年金論争トピックと真の改善を待つ年金問題との乖離](#)」【特集 社会保障改革の政治経済学 社会政策学会第115回大会共通論題】『社会政策学会誌 社会政策』

この論文は、次の言葉で終わっている。

今日のマニフェスト選挙の影の側面としての政局の混乱は、野党のマニフェストを検証する制度の中に野党が参加するインセンティブが、どこにも組み込まれていない

ことから生まれていると考えている。政党交付金の給付などとリンクできないものか・・・。

当面、それが無理でも、本稿の読者が、ここに登場してきた政治家の言葉から彼らの適正を判断し、次の選挙での投票先を決めてくれるのであれば、社会政策学会からの依頼で「民主主義の運営コスト」と化し遊び時間を費やしてこの論文を書かされたわたくしとしては、それなりに本望ではある。

追記——2011年12月28日のHP

まあなあ。

さっき、民主党税制調査会での藤井裕久会長が、民主党議員を前にして説いた言葉がテレビで流れていたけどな。

- 「だれが何を言ったのかは必ず歴史に残るんです」

次の原稿の中での彼の言葉も歴史に残ってるから、今日の言葉は正しいんだろうけどね。

- 「[社会保障改革と税制——国家運営行き詰まりの原因と正直な未来像](#)」『月刊福祉』

2011年9月号

民主党の悪質な選挙戦略に強い影響を与えたもう1人に、大蔵省出身で、党内では財政通と認められていた藤井裕久氏、現在の「民主党税と社会保障の抜本改革調査会会長」がはたした役割は大きかった。藤井氏の発言については、今年1月の谷垣禎一自民党総裁の代表質問の言葉を紹介しておこう。

藤井官房副長官はかつて「総予算207兆円の1割から2割くらいは簡単に切れる」と豪語されましたが、何のことはない、政権交代の効果として切れたのは総予算の1割ではなく、目標額の1割に過ぎません。

先週の講演でも使ったスライド

ウソみたいな本当にあった話

- 枝野幸男氏「[財源のことは]難しいことではありません。政権をかえていただければ、やる気があるかどうかという問題であって、…一度任せていただければ実現をいたします」
- 小沢一郎氏「政権が取れば財源など何とでもなる」
- 鳩山由起夫氏「消費税は20年間上げない」「消費税は議論さえする必要がない」
- 藤井裕久氏「総予算207兆円の1割から2割くらいは簡単に切れる」

ウソみたいな本当にあった話(続き)

- 前原誠司氏「仮にこのまま民主党が政権をとっても大変です。私は「君子豹変」しないかぎり、まともな政権運営はできないと思いますよ。今、民主党が最もしてはならないことは、国民に耳障りのいいことばかりを言っておいて、仮に政権をとった時に、「やっぱりできません」という事態を招くこと」08年7月
- 玄葉光一郎氏「今度の参議院選挙のポイント
は正直さだと思っています」10年4月

あと、マニフェストが実現できなくなったのは、震災のせいだと、すました顔して言えるのもいたな。

- 勿凝学問 373 [そのウソは、人として本当について欲しくないんだけどなあ、民主党には——本能寺の変の報を受けた秀吉の心境だったのかね](#)

ちなみに、ちょうど2年ほど前、日医の医療政策会議報告書用にした文章の最後は、

ところが、負担増と社会保障の給付カットは、いずれの道を選択するとしても、現政権の公約違反となってしまう。そしてここで重要なことは、医療をはじめ社会保障の給付増を行うためには負担増しか選択肢がなかったことは、何年も前か

ら分かっていたという事実である。それゆえに、大学で教育にも携わっている私が、手段を選ばぬ卑怯な者勝ちの生き方を推奨していると学生に受け止められかねない、「約束を反故にするように」ということを彼ら現政権に言うはずがない。

日本医師会医療政策会議報告書

オリジナル原稿 「[経済成長と医療政策、これを議論する前提としての国家財政の持続可能性](#)」

最近だと、次でもどうかな。

- 2011年11月9日 [Aging Forum 2011](#) 於 目黒雅叙園
 - 権丈報告要旨 [「持続可能な中福祉という国家像」](#)

今となれば、彼らが言ってきたことは、国民の無知を見越してのただのウソであったことは周知の事実であるが、問題の根の深さは、これが実行可能性のない話であることを、当時から分かっていたながら、彼らは公約として掲げていたことだ。

政治が、社会保障・税一体改革を実現するためには、政府は、今年7月1日の成案で示されたように民主党が全否定した自公路線を受け容れざるを得ない。さらには、ねじれ国会の下では、民主党がその路線を全否定して敗退に追い込んだ野党の協力を得なければならない。はたしてそういうことは、現実の政治の場で起こり得るのか。